# 「熟☆ギャル☆白書　極楽仁王勃ち」(シナリオ題名／ステキな片想い)

山崎浩治

# 「熟☆ギャル☆白書　極楽仁王勃ち」シナリオ

１　オフィス街(昼)

　南　「南、ずっとずっと涼介のことが好きだったの！」

　　フリフリワンピースを着た野田南(髪には大きな花柄のリボン。大きなキャリーバッグを携えている)、

　　スーツ姿の田嶋涼介に愛の告白をしている。

涼　介「そんなこと突然言われても困るよ、南！　オレ、気持ちの整理がつかない。すまん、いま仕事中だから(と、　　逃げ出す)」

　　会社に向かって駈けていく涼介の背中。

　南　「待ってよ涼介！　南がこんなに可愛くなって戻ってきたのに！　んもう！」

２　高台にある展望台

　　南、立って街並みを見ている。

　南　「(悲しみに暮れたその表情)‥‥」

　高台から見下ろす街の風景。

　高台の縁に立った南、一歩足を踏み出す。

３　「面接会場」と張り紙された殺風景な一室

　　南、男性面接官の前に座っている。

面接官「(仏頂面で)それで、あんたの志望動機は？」

　南　「(我に返って困惑し)‥‥あなたとは以前どこかで会いましたっけ？」

面接官「(オネエ言葉で)ふふふ。もう忘れちゃった？」

　南　「‥‥これってバイトの面接か何か？」

面接官「バカ言わないの！　ここは幽霊審査室よ！」

　南　「幽霊審査室‥‥？」

面接官「誰でも幽霊になれたら、あっちの世界は幽霊だらけになるでしょ。だからここで幽霊になりたいヒトの志望動　　機を聞いて、〝祟ってやる！〟とか〝呪ってやる〟とか、〝愛する人にもう一度会いたい〟とか強～い動機がある　　人だけ選んで、幽霊になってもらうわけ。幽霊って東大、司法試験並みに狭き門なのよ。分かる？」

　南　「はあ‥‥」

面接官「幽霊にならない一般ピーポーは天国か地獄に行くの。で、あんたはどうして幽霊になりたいの？」

　南　「‥‥幽霊になるってことはつまり、南はもう死んでるってことなんですよね」

面接官「自分が死んでることも分からないでユーカツしに来たの！　これだから最近の死人(しびと)は‥‥」

　南　「あの‥‥ユーカツって？」

面接官「幽霊活動、略してユーカツでしょ！」
　南　「すみません！」
面接官「けど、あんたみたいな人、突然死ではよくいるのよね」
　南　「南、突然死したんですか！‥‥もしかして交通事故？」
面接官「記録では〝自殺〟となってるけど」
　南　「え～～っ！」
面接官「死んだショックで記憶も一時的に喪失してるのか」
　南　「南が自殺なんて信じられないよ！　自殺した理由、教えて下さい！」
面接官「自殺の理由が知りたい、か‥‥ま、幽霊の志望動機として悪くないわね。いいわ、あなたを採用してあげる。　　とりあえず誰のとこに化けて出ちゃう？」
　南　「えっと、ちょっと思いつかないんですけど」
面接官「世話の焼ける子ねぇ‥‥参考までに教えてあげる(水晶玉を出し、南に見せる)」
　　×　　×
　　水晶玉に写った高台にある展望台(＃２)。
　　佇んでいる南。
　　×　　×
面接官の声「これが死の直前のあなた。この直後、あんたはこの展望台から飛び降りる」
　　×　　×
　　水晶玉に写った転落死した南。
　　何かに手を伸ばしているが、手先は見えない。
　　×　　×
　南　「(言葉を失って)‥‥」
面接官「ちなみに死の直前、あんたが考えていたことは‥‥」

４　水晶玉に映し出された南と涼介のセックス(南の妄想)

５　もとの面接会場
面接官「彼はあんたが学生時代、同棲してた幼なじみの田嶋涼介よ」
　南　「涼介‥‥？」
面接官「会えば思い出すわ。とりあえず、彼んとこに化けて出るってことでいいかしら？　一応、肩書きは浮遊霊って　　ことにしとくから、後は自分で適当に対処して。はい、次の人」
　　見るからに「死者」の男、南の背後に立っている。
　南　「(のけぞって席を立ち、部屋を出るところで振り返る)　あの‥‥あなたは天使さん、なんですか」
面接官「アタシたちの業界では、死神と呼ばれてる(ニヤリと笑う)」
南の声「(悲鳴)いや～～～～っ！」

６　渦巻きの中を落下していく南

７　一軒家・涼介の部屋(夜)

　　涼介、パソコンに向かって仕事している。

　　その前に座ってニコニコしている南。時折、嬉しそうに涼介の体臭を嗅いだりしている。

　　涼介、チラチラ南を見るが、仕事を続けている。

　南　「ムフフ」

　　南、パンチラなどして涼介の気を引こうとするが、涼介は完全にシカト。

　南　「(苛立って)どうして南をシカトするのよ！」

涼　介「(もキレて)だって、おまえはオレの幻覚だろ！　南は一週間前に死んでる。オレは葬式にも通夜にも行ってきたんだ。幻覚に話しかけるほどオレは病んじゃいないんだよ！」

　南　「南は幻覚なんかじゃありませんよ～だ！　幽霊です！」

涼　介「余計悪いわ！‥‥って、オレはどうして幻覚と会話してるんだ。やっぱ最近、仕事が忙し過ぎたのかな。ストレス溜まってんのかな。今日だって仕事持ち帰りだし」

　南　「だから南は、幽霊なんだってば！」

　　仁王立ちした南、恐ろしい形相で涼介に妖気を送る。

　　室内が激しくポルターガイスト現象。

涼　介「うわ～っ、やめろ、南！」

　南　「(見得を切って)幽霊ナメんなよ！」

涼　介「わ、分かった‥‥百歩譲って南が幽霊だとしよう。けど、なんでオレんとこに出てくんだよ？　オレに恨みでもあんのかよ！」

　南　「いや、それがあたしにもよく分からないのよ。勢い、ていうか、その場の空気、ていうか‥‥」

　　×　　×

涼　介「つまり、南は自殺した原因を知りたくて幽霊に‥‥」

　南　「そう。だから、南が自殺した理由、教えて」

涼　介「オレが知るかよ！　南は遺書も残さず、高台から飛び降りた。知ってるのはそれだけだ‥‥」

　南　「涼介は学生時代、南と同棲してたんでしょ」

涼　介「同棲じゃない！　誤解を招く言い方すんな！　オレたちはルームシェアしてただけ！」

　南　「でも、南が最後に会ったのは涼介だよね。その時、何があったの？」

涼　介「‥‥南は何年も海外留学してたんだよ。そして二年ぶりに帰国してオレの前に現れ、告白した。オレのこと好きだった、って」

　南　「涼介はどうしたの？」

涼　介「混乱して、その場を逃げ出したさ」

　南　「どうして？　こんな可愛い女の子が告白したのに！」

涼　介「それにしたって、南は変わり過ぎだろ！　なんか変にキャピキャピした喋り方になってるし。本当にこの南な　　のか！(と、スマホの画面を見せる)」

×　×

そこに写っているのは――熟女顔の南。

南の声「何よ、この熟女！」

涼介の声「それが昔の南なんだよ！」

×　×

　南　「どひゃ～～っ。けど南は涼介の幼なじみだよね？」

涼　介「おまえはガキの頃から〝熟女顔〟だったの！」

　南　「思い出した！」

×　×

フラッシュ。

ランドセルを背負った小学生時代の昔の南。

セーラー服を着た女子高生時代の昔の南。

南の声「小学生の頃から、南のあだ名はいつも〝お母さん〟。ランドセル背負っても、セーラー服着てもコスプレって　　言われた。だから全身整形で心機一転して〝ギャル・デビュー〟したんだった！」

×　×

涼　介「南は海外で整形手術を受け、ギャルになって日本に帰ってきた！　そんな現実、いきなり突きつけられて受け入れられると思うか！」

　南　「(言葉を失って)‥‥」

８　学生時代の涼介の部屋(同じ一軒家・回想)

布団で眠る涼介――を起こしている割烹着姿で、

熟女顔の昔の南(以下、昔の南は生活感漂う衣装)。

昔の南「ねえ涼介、起きなさい。授業、遅刻するよ！」

涼　介「‥‥南、もう十分だけ寝かせてくれ」

昔の南「(涼介の寝顔を愛おしそうに見て)‥‥」

涼介の声「地元の高校を卒業したオレたちは、幼なじみのよしみで、この一軒家をシェアしながら別々の大学に通ってたんだ。正直言うとオレにとって南はシェアメイトというより、下宿のおばさんみたいだったけど‥‥」

９　一軒家の脱衣所(回想)

鼻歌を歌いながら昔の南、汚れ物を洗濯機に放り込んでいる。

昔の南「(花柄のハンカチにふと手を止めて)南が旅行に行った時、お土産でプレゼントしたハンカチ‥‥大事に使ってくれてるんだね、涼介」

続いて涼介のパンツが出てきて、嬉しそうに頬ずりする昔の南。パンツには陰毛がつい

ていた。
昔の南「お宝お宝！」
　　昔の南、「宝箱」とマジックペンで書いた箱を開く。
　　そこにはジブロップに入った「涼介の髪の毛」「涼介のすね毛」「涼介の鼻毛」など、
　　涼介に関する品がたくさん入っていた。
昔の南「南ってもはや、変態の域に入ってるなあ‥‥ふふふ」
南の声「‥‥南は幼なじみだった涼介のことがずっと好きだったんだ」
　　×　　×
　フラッシュ。
　　オフィス街を走っていく涼介(＃１)。
　　×　　×
南の声「でも涼介は、変身して帰ってきた南を拒絶した。悲しみに暮れた南は‥‥」

**10**　河川敷(回想)
　　手すりにもたれ、茫然としている南。
　南　「‥‥やっぱり、整形美人じゃダメなのかなあ」
死神の声「あんた、死相が出てるわよ‥‥」
　南、振り返ると死神が立っている。
　南　「‥‥南とどこかで会ったことある？」
死　神「会うのは今日が初めて‥‥でも、近いうちまた会うよ。さあ、あんたの生気を吸わせて」
　南　「(死神に見つめられ、虚ろな表情になる)‥‥」

**11**　ラブホテルの一室(回想)
　　セックスしている南と死神。

**12**　涼介の部屋(現在)
　　南と涼介が向かい合っている。
　南　「(思案顔で)いま思うとあの人、死神さんだったような‥死ぬ運命だった南の生気を奪いに来たんだね」
涼　介「ナニぶつぶつ言ってんだ、南？」
　南　「南は涼介にフラレたショックで飛び降り自殺し、その怨念を晴らすため、幽霊になってここにいる‥‥そうと　　しか考えられない。よ～し祟ってやる！　呪ってやる！」
　　恐ろしい目で、涼介を睨む南。
涼　介「いやいや、ちょっと待て！　結論を急ぐな！　安直に怨念を晴らそうとするんじゃない！　オレはあの時、南　　をフッたわけじゃないんだ！」
　南　「いやいや！　あれは確実にフッてる！」

涼　介「いやいや！　あれは取り乱しただけ！　だって南が別人になって帰って来たんだぜ！空気読めよ！　南は相変わらず、空気を読めないヤツだな」
　南　「(考え込んで)言われてみれば、そんな気もする」
涼　介「だろ。オレが自殺の原因になるはずはないんだ」
翔子の声「‥‥あの‥‥涼介クン？」
　　涼介が振り向くと、丸岡翔子が立っていた。
涼　介「‥‥翔子ちゃん！」
翔　子「ごめん。勝手に入ってきて‥‥呼んでも返事がなかったから」
涼　介「こっちこそ、ごめん。ちょっと取り込み中で‥‥」
翔　子「お葬式の時にゆっくり話したかったんだけど‥‥」
涼　介「オレもさ。今日はどうしたの？」
翔　子「うん、南のことで話したいことがあって‥‥」
　南　「(翔子の顔を怪訝そうに覗き込んで)‥‥この人、誰？」
翔　子「(南が見えない様子)‥‥」
涼　介「翔子ちゃんのことも忘れたのか。ガキの頃からの幼なじみだろ。オレたち一緒に東京に出てきて、この一軒家でルームシェアしてたじゃん」
　南　「(手を叩いて思い出し)あ〜〜、翔子、翔子！」
翔　子「(不思議そうに)涼介クン、誰と話してるの？」
涼　介「あれ？‥‥翔子ちゃんは見えないのか！」
翔　子「何が‥‥」
涼　介「ここに南がいるじゃないか！」
翔　子「(顔色を失い)冗談にもほどがあるよ！」
　　翔子、涼介の頬を平手打ちし、部屋を飛び出して行く。
涼　介「(茫然と立ち尽くして)‥‥」

**13**　近所の公園
　　翔子、一人でブランコに揺れている。
　　その姿を傍で見ている南。
南の声「思い出した‥‥あたしがずっと好きだった涼介は‥‥翔子を愛してた‥‥」
　　ブランコに揺れる翔子。
　　スマホに表示された画像を見ている。
　　画像には翔子と涼介、昔の南が写っている。
翔　子「(切ない眼差しで画像を見つめ)‥‥」
　　隣のブランコに立った南が漕ぎ出す。
　　翔子の視点で――無人のブランコが揺れだした。
翔　子「(瞠目してブランコを凝視して)‥‥」

**14**　一軒家(別の日の朝)

涼　介「(出勤姿で)オレには見えるのに、翔子ちゃんには見えない。南のヤツ‥‥まさかオレに取り憑くつもりじゃな　　いだろうな」

　　いそいそと「悪霊退散」のお札を室内に貼る涼介。

　　そこに裸にバスタオルを巻いた南が出てきた。

　南　「朝風呂はいいわ〜、極楽極楽！　ま、幽霊の南が言うのもシャレになんないけど。涼介、シャンプー切れたか　　らチェンジよろしく！」

涼　介「幽霊が朝シャンしてんじゃないよ！　幽霊ならもうちょっと幽霊らしく出てこいって！」

　南　「南、陰気なのは苦手なの！　何よこれ！　誰が悪霊だつ〜の！(「悪霊退散」のお札に妖気を発する)」

　　吹き飛ぶお札。

涼　介「(腰を抜かして)‥‥ひぇぇぇ」

**15**　街の夕景

**16**　一軒家の前の道

　　スーツ姿の涼介、仕事を終えて帰ってくると、ＯＬ姿の翔子が立っていた。

涼　介「翔子ちゃん！」

翔　子「こないだはごめん‥‥」

　　気まずそうに向かい合う翔子と涼介。

涼　介「‥‥うち、寄ってく？」

**17**　一軒家・涼介の部屋

　　微妙な空気でお茶を飲んでいる翔子と涼介。

　　二人の顔色をキョロキョロ窺っている南。

涼　介「(「しっ、しっ」と南を追い払う仕草で)‥‥」

　南　「(無視して)‥‥」

翔　子「(そんな涼介を怪訝に見て)‥‥ゆっくり話すの久しぶりだね、涼介クン‥‥仕事はどう？」

涼　介「〝おまえの頭はなんのためにある？　使うため？　そうじゃない。下げるためだ〟！‥‥これ、上司の口癖。　　オレ、取引先に謝るためにサラリーマンになったみたい」

翔　子「(クスッと笑って)〝土日は休みじゃなくて、休んでもいい日。自分が休めると思ったら休んでもいいんじゃな　　い？〟‥‥これ、あたしの上司の口癖。お蔭で三ヶ月休みなし。もう限界かも‥‥あたしね、社会人になって世界がモノクロに見えるの。学生時代はあんなにカラフルだったのに」

涼　介「いま思うとあの頃が人生最高の瞬間だったよな」

翔　子「ちょっとしたことでも毎日がキラキラしてね」
涼　介「あのさ、翔子ちゃんはどうして、あの夜‥‥」
翔　子「ん？」
涼　介「いや、何でもない‥‥」
翔子・涼介「(気まずそうに黙り込む)‥‥」
　南　「(立ち上がって、明るく)久しぶりに三人そろったことただし、宴会しよっか！　今晩は飲み明かそうぜ！　イエ　　ーイ！」
涼　介「(吐き棄てて)空気読めよ。そんな雰囲気じゃないだろ」
翔　子「ねぇ涼介クン‥‥いまも南がここにいるの？」
涼　介「いると言っても、どうせ信じないでしょ」
翔　子「(ふと何か思いつき)‥‥」
　　バッグから二本のペンと手帳の紙を取り出す翔子。
　　手帳の切れ端に「ＹＥＳ」と「ＮＯ」の文字を書く。
　　翔子、二本のペンを交差させて重ね、「チャーリーゲーム」を始める。
翔　子「南ちゃん、南ちゃん‥‥ここにいますか」
　　すると上のペンが動いて「ＹＥＳ」を指す。
　　南が息を吹きかけ、ペンを動かしたのだ。
翔　子「‥‥いまも涼介クンのことが好き？」
　　ペンが「ＹＥＳ」を示す。
翔　子「(硬い表情で立ち上がり)あたし‥‥やっぱり帰る」

**18**　高台にある展望台(別の日の昼)
　　花が手向けられている。
　　やってきた南、高台から街並みを見下ろす。
　南　「ここが南が飛び降りた場所‥‥」

**19**　高台にある展望台(回想)
　　大学生時代の翔子、涼介、昔の南、話している。
涼　介「ここから眺める街の風景って、地元の高校に似てるよな。ほら、あそこにショッピングセンターがあって‥‥」
翔　子「あっちに駅！　ほんと、ソックリ！」
　　街並みを指さす涼介を切なく見つめる昔の南。
　　そして涼介もまた、翔子を切なく見つめている。
昔の南「ここにいると地元、思い出すね」
涼　介「部活終わった後とか、校舎の屋上に上がって、三人でよく焼き芋食ったよな‥‥」
翔　子「焼き芋屋のおじさん、校門のとこまで来てくれて」
昔の南「南のこと、いつも生徒の保護者と間違えるのよ、あのおじさん」

涼　介「ま、みんなから〝お母さん〟って呼ばれてるから無理もないけどな」
翔　子「おいしかったなあ、あの焼き芋‥‥」
昔の南「東京来てからも食べたけど、あの焼き芋が一番おいしかったね」
涼　介「‥‥写真撮ろうぜ！」
　　自撮りする翔子と涼介、昔の南。
　弾けるような、三人の笑顔。

**20**　高台にある展望台(現在)
　　地上を見下ろしている南。
　南　「あたし、どうして死んじゃったんだろう‥‥」

**21**　一軒家(夜)
　　パソコンに向かって仕事する涼介の傍らに、南がいる。
　南　「涼介は‥‥翔子と付き合ってないの？」
涼　介「ああ‥‥南が留学してすぐ、この一軒家を出てったん　　だよ」
　南　「どうして！　涼介はあの夜、翔子と結ばれたじゃん！」

**22**　一軒家の玄関(深夜・回想)
　　昔の南がドアを開けると、泥酔した翔子が帰ってきた。
昔の南「翔子、どうしたの、そんなに酔っ払って」
翔　子「いいじゃん、酔っ払ったって‥‥」
　　翔子、突如、昔の南にキスを求める。
昔の南「(拒絶して)翔子、飲み過ぎ！　悪酔いしてるよ！」
翔　子「‥‥いいじゃん、女同士がキスしたって！」
昔の南「やだ、気持ち悪い！」
翔　子「どうして気持ち悪いのよ！(踵を返して玄関を飛び出す)」
　　そこに涼介が帰ってきた。
涼　介「‥‥翔子ちゃん」
翔　子「(涼介の胸に飛び込む)‥‥」
　　昔の南の目を意識するように、涼介に激しくキスを求める翔子。

**23**　一軒家・涼介の部屋(回想)
　向かい合っている翔子と涼介。
涼　介「‥‥ほんとにいいの？」
翔　子「‥‥うん」
　　ぎこちなくセックスを始めていく翔子と涼介。

**24** 同(時間経過)

行為の後。ベッドに残った処女の印。

気まずく黙り込む翔子と涼介。

――その光景を廊下から覗いている昔の南。

昔の南「(何かを決意した表情で)‥‥」

**25**　もとの部屋(現在)

涼　介「オレと翔子ちゃんが結ばれたのはあの夜が初めてだったんだ」

　南　「‥‥涼介はずっと翔子に片思いだったもんね」

**26**　高台にある展望台(インサート)

語り合う翔子、涼介、昔の南(＃19)。

昔の南は涼介を見つめ、涼介は翔子の横顔を見つめている。

**27**　一軒家の居間(別の日・回想)

涼介、翔子に告白している。

涼　介「翔子ちゃん‥‥オレと付き合ってほしいんだ」

翔　子「涼介クンの気持ちは嬉しいよ。だけど涼介クンは幼なじみ。いまさら彼氏として見られない。ごめんね」

言い残し、部屋を去る翔子。

――そんな二人の会話を物陰で聞いていた昔の南、消沈している涼介に声をかけた。

昔の南「彼氏として見てもらえないんなら、彼氏として見てもらえるようにしなさいよ」

涼　介「‥‥どういうこと？」

昔の南「翔子にキスするとか‥‥」

涼　介「だけどオレ‥‥」

昔の南「経験がないなら‥‥南を練習台にしてキスすれば？」

涼介に向かって、唇を突き出す昔の南。

固まったまま、昔の南にキスする涼介。

不器用な二人のキス。

涼　介「(吹き出して)南とキスなんか、やっぱムリ！　母ちゃんとキスしてるみたい！(と腹を抱えて爆笑)」

昔の南「(悲しげな表情で)‥‥」

**28**　もとの部屋(現在)

話している南と涼介。

涼　介「オレは翔子が酔っ払って帰ってきたあの夜から、恋人としての関係が始まると思ったんだ。だけど何も始まら　　なかった‥‥」

　南　「どうして」
涼　介「‥‥オレたちはきっと三人で一つだったんだよ」
　南　「(遠い目で)‥‥南ね、涼介と翔子が結ばれているのを見て、海外留学を決意したんだよ」
涼　介「‥‥そうなのか」
　南　「だって南、あのままでいたら、絶対に翔子ちゃんに敵わないもん。それで海外に行ってアルバイトして、実家　　の援助も受けて全身整形したの」

**29**　一軒家(回想)
　　キャリーバッグを携えて一軒家を出ていこうとする昔の南。
　　ふと足を止め、洗濯物カゴに入っていたハンカチを拾い上げる――南が昔プレゼントしたハンカチ。
昔の南「ごめんね涼介‥‥涼介の匂いつきハンカチをもらってく‥‥」
　　ハンカチを胸に抱いて、部屋を後にする昔の南。

**30**　高台にある展望台(現在)
　　南がやってくると、翔子が花を手向けていた。
　　手を合わせて何か祈っている翔子。
　　南、翔子の傍らに立つが、翔子は南に気付かない。
　　微笑んだ南が、翔子に息を吹きかける。
　　無風なのに、風になびく翔子の髪。
翔　子「南、そこにいるの」
　南　「いるいる！　めっちゃ傍にいるよ～」
翔　子「(その瞳から涙があふれ出してきた)どうしてあたしには見えないのよ、南！　ずっとずっと南のことを愛して　　たのに！」
　南　「はい‥‥？」

**31**　高台にある展望台(インサート)
　　語り合う翔子、涼介、昔の南(＃19)。
　　昔の南は涼介を、涼介は翔子の横顔を見つめている。
　　そして、翔子の視線の向こうには昔の南がいた。
　　しかし、翔子の視線に、昔の南は気付かない。

**32**　一軒家の居間(回想)
　　キスしている昔の南と涼介(＃27)。
　　物陰から見つめていた翔子が涙を流して踵を返す。

**33**　公園(回想)

翔子、泣いている。

**34**　一軒家・玄関(＃**22**　回想)

泥酔して帰ってくる翔子。

翔子の声「南が涼介クンのことが好きなのは知ってた。でも、あたしは南にあたし自身を見てほしかった。親友として　　じゃなくて、一人の女として」

昔の南にキスを求める翔子。

しかし昔の南は翔子を拒絶した。

翔　子「(傷ついて)‥‥」

**35**　もとの展望台

翔　子「南が海外留学から帰ってくるって涼介クンから連絡を受けたあたしは、一目会いたくて涼介クンの会社近くに　　行ったわ‥‥」

**36**　オフィス街(＃１・回想)

翔子、小走りでやってくる。

話し合っている南と涼介。

思わず立ち止まって物陰に隠れる翔子。

翔子の声「最初は南だとは思わなかった」

その時、駆け出す涼介。

　南　「(涼介の背中に)待ってよ涼介！　南がこんなに可愛くなって戻ってきたのに！　んもう！」

翔　子「(愕然)‥‥」

翔子の声「あたしの大好きな南が変わってた‥‥」

**37**　傷心で歩く南を尾行する翔子(回想)

**38**　高台にある展望台(回想)

街並みを見ている南(＃２)。

――を物陰から見つめている翔子。

その時、一陣の風が吹き、南の髪のリボンが高台の縁に飛ばされた。

リボンはよく見ると、いつかの涼介のハンカチをリメイクしたものだった。

南、リボンを取ろうと一歩踏み出した瞬間、翔子が飛び出した。

翔　子「南のバカ、バカ、バカ！」

　南　「‥‥翔子？」

翔　子「‥‥どうして整形なんかしちゃうのよ！　昔のままの南で最高だったのに！　南なんて大嫌い！　(言い捨て、　　その場から駆け出す)」

南　「(腑に落ちない表情で)なんなのよ、翔子ったら‥‥」
　　南、リボンを取ろうと、高台の縁に向かう。
　　リボンに手を伸ばす南。
南　「あ〜あ、涼介と結ばれたかったなあ‥‥」
　　その瞬間、再び強い風が吹き、南のバランスが崩れた。
南　「あ‥‥！」
　　地上に落下していく南。

**39**　高台下の地上**(**現在**)**
　　地面にたたき付けられた南が死んでいる(＃３)。
　　伸ばした手先には、あのリボンが大事そうに握られていた。
　ーーそれは南が見たイメージ。
　　南、死んだ南の傍に立って、自分を見下ろしている。
南　「南‥‥自殺じゃなかったんだ‥‥」
　　その時、背後から声がした。
死　神「あんたの死の原因も分かったことだし、そろそろ成仏する？」
　　南の背後に死神が立っている。
南　「死神さんは‥‥南が自殺じゃないこと知ってたよね？」
死　神「さあ、どうかしら。あんたの選択肢は二つ。ここで成仏して輪廻のサイクルに戻る‥‥もう一つは」
南　「‥‥」
死　神「幽霊として、この世にとどまる。大好きな彼の背後霊になるってのもオススメよ」

**40**　河川敷
　　南、考え込んでいる。
南　「成仏したら涼介にはもう会えない‥‥だけど背後霊なら、いつも涼介の傍にいられる。話だってできる。守護　　霊として涼介を守ってもいいし‥‥うん、それも幸せよね！(と納得しかける)」
昔の南の声「幽霊として一緒にいるだけでいいの？」
南　「えっ‥‥(と、振り返る)」
　　立っていたのは昔の南だった。
昔の南「そんなことのために南は整形したの？　昔の南を‥‥このあたしを捨てたの？(その真摯な眼差し)」

**41**　翔子の部屋
　　翔子、「チャーリーゲーム」をしている。
翔　子「南ちゃん、南ちゃん‥‥翔子のことが好きですか」

ペンはぴくりとも動かない。
翔　子「(泣きそうな顔で)南ちゃん、南ちゃん‥‥翔子のことが好きですか」
昔の南の声「南は翔子のことが大好きだよ」
翔子の前に、ニコニコ微笑む昔の南が立っている。
翔　子「南！(昔の南に抱きついて)あたし、南のことを愛してた！　それだけを伝えたかったの！」
昔の南「(よしよしと翔子の頭を撫でて)‥‥」
翔　子「(泣きじゃくりながら)子供のころ、クラスのみんなからイジメられてた時、南だけがあたしの味方になってくれたよね」
昔の南「南もイジメられてたからね。さんざん〝お母さん〟って呼ばれて。もっとも南は空気読めなかったから自分がイジメられてるって気付いてなかったんだけど。タハハ‥‥翔子をイジメなかったのはもう一人いるじゃん」
翔　子「‥‥うん」
昔の南「翔子のことが大好きだから、南たちがイジメられているとケンカ弱いくせに、いつも助けにきてくれた涼介。
結局、いつもボコボコにされるんだけど」
翔　子「二人がいてくれたから、あたしはどんなにイジメられても平気だったよ」
昔の南「三人一緒で結束して小・中・高校と進むうち、もう誰も南たちをイジメなくなった。南たちは最強の仲良し三人組だったのよ」
翔　子「なのにどうして南、死んじゃうのよ！　あたし、ずっとずっと一緒にいたかったのに！」
昔の南「ごめんね、翔子。南の分までいっぱい生きて‥‥そして幸せになって」
翔　子「南‥‥」
瞳から溢れる翔子の涙を吸う昔の南。
昔の南「南のことを愛してくれて、ありがと翔子‥‥」
口づけをかわす翔子と昔の南。
やがて交わっていく翔子と昔の南。
絶頂の瞬間、昔の南が消えた。
翔　子「(寂しさと喜びが入り交じった表情で)‥‥あたしの方こそ、ありがと、南」
――その光景を眺めている死神。
死　神「彼女は大好きだった親友を失い、仕事にも疲れて生きる意欲を失っていた‥‥だから生気を吸いに来たのに。どうやら無駄足だったみたいね(不意に消えた)」

**42**　一軒家の涼介の部屋
涼介、スマホの画像を見ている。
――昔の南、翔子、涼介が笑っている。
涼介の背後に現れる南。

　南　「涼介は知ってたんだよね。翔子が南を好きだったこと」
涼　介「ああ‥‥ずっと翔子ちゃんを見てたからな。翔子ちゃんがいつも南を見てたことは知ってた。気付いてなかっ　　たのは空気を読めない南だけさ」
　南　「どうして南に教えてくれなかったのよ！」
涼　介「口惜しかったんだよ。好きな女の子が〝お母さん〟っていうあだ名の同級生に憧れてるんだもんな」
　南　「‥‥」
涼　介「だから、南が死んだ時、思ったんだ。これで翔子ちゃんはオレの方を向いてくれるんじゃないか、って‥‥オ　　レはズルい男さ。だから南‥‥オレを呪うんだったら、呪えばいい」
　南　「大好きな涼介を呪えるわけないじゃん‥‥南、成仏する。そして生まれ変わって、涼介と会う！　それまで少　　しの間、さよなら‥‥」
　　涼介、南を抱きしめる。
　南　「最後のお願い‥‥南を抱いて」
　　結ばれていく南と涼介。
　南　「ずっとずっとず〜〜っと好きだったよ、涼介！」
涼　介「南‥‥！」
　　南の瞳から涙が溢れる。

**43**　高校の校舎の屋上
　　無邪気に語り合う昔の南、涼介、翔子(昔の南と翔子はセーラー服)。
　三人の零れるような笑顔。

**44**　もとの部屋
　　高まっていく南ーー
　　それにつれ、透明になっていく南。
　　達した瞬間、南が微笑んで、消えた。

**45**　展望台から見た街並み(別の日)

**46**　高台にある展望台
　　翔子と涼介が街並みを見下ろしている。
翔　子「ここにいると何だか昔を思い出すね」
涼　介「まるで南も一緒にいるみたいだ」
翔　子「きっといるよ。あたしたちは最強の仲良し三人組なんだから」
　　見つめ合う翔子と涼介。

**47**　一軒家(一年後)

結婚写真が飾られている。

新郎と新婦は涼介と翔子。

壁に飾られた半紙に「命名　南」と記されている。

ベビーベッドには帽子を被った赤ん坊。

その顔は――南。笑顔でガラガラを振っている。

南の声「ただいま、南が帰ってきたよ！」

おしまい